



アインシャムス大学外国語学部日本語学科

2015 年度
修士学位論文

現代川柳とベーラムエルトニセイの作品における滑稽
と笑い

意味論的分析

氏名：ヤスミーナ・アハマド・エル・アブハル

指導教授

アインシャムス大学
外国語学部アラビア語学科
ムハンマド・アル・ワゼール
教授

カイロ大学文学部
日本語日本文学
ワリード・ファルーク・イブラヒム
准教授

目 次

序論	3
0.1 意味論	5
0.2 滑稽	9
0.3 川柳	10
0.4 ベーラムの詩	11
第一章：川柳における滑稽	12
1.1 川柳に見られるレトリック技法	13
1.1.1 反語法	13
1.1.2 言葉遊び	24
1.1.3 修辞疑問・設問法	27
1.1.4 転喩	30
1.1.5 換喩	33
1.1.6 直喩	38
1.2 川柳における隠喩を用いた滑稽	40
1.2.1 隠喩の選択理由	40
1.2.2 隠喩の紹介	42
1.2.3 川柳における隠喩の例	46
1.2.4 川柳における滑稽の技法とされる隠喩の特徴	58
1.3 まとめ	66
第二章：ベーラムの詩における滑稽	69
2.1 ベーラムの詩に見られるレトリック技法	70
2.1.1 al-mufāraqah	70
2.1.2 al-taṣbyh	80
2.1.3 al-kināyah	89
2.1.4 al-tawriyah	95
2.1.5 al-ʔitnāb	100
2.2 ベーラムの詩における al-ʔistiṣārah を用いた滑稽	101
2.2.1 al-ʔistiṣārah の紹介	102
2.2.2 ベーラムの詩に見られる「ʔistiṣārah taṣryḥyyah」と「ʔistiṣārah maknyya」	104
2.2.3 ベーラムの詩における滑稽の技法とされる al-ʔistiṣārah の特徴	119

2.3 まとめ	123
第三章：川柳とベーラムの詩における滑稽との対照	127
3.1 両者の滑稽に影響する要素	128
3.1.1 言語の影響	129
3.1.2 詩の構成の影響	129
3.1.3 作者と歴史の影響	130
3.2 川柳とベーラムの詩における滑稽の表現の対照	135
3.2.1 反語法と al-mufāraqah	136
3.2.2 隠喩と al-ʔistiṣārah	139
3.2.3 転喩と al-kināyah	143
3.2.4 言葉遊びと al-tawriyah	145
3.2.5 ベーラムの詩だけに滑稽の技法としてあげられるもの	147
3.2.6 川柳とベーラムの詩における滑稽の話題にされるものの無限性とその類似点と相違点	147
結論	149
音声記号表	156
参考資料と参考文献一覧	157

序論

本論では川柳とベーラム・エル・トニセイの詩における滑稽を考察することを目的としている。方法は意味論的分析である。具体的に言うと、レトリック技法に基いて滑稽を分析するのである。

本研究には四つの要素がある。それは意味論、滑稽、川柳、ベーラムの詩である。これからそれぞれの要素を選んだ理由を述べ、また一つ一つ簡単に紹介する。

滑稽を選んだ理由は、滑稽、笑いは人間に共通のものである。その一般的な特質は、文化の相違、環境、風土の相違とは関係なく、あらゆる人々が共通に分かち合っていると思われる。しかしその文学的な表現となると、言語、発想、思考、感性といったものの相違によって、それぞれの文化圏の間で著しい違いが現れてくるように思われる。そのため滑稽はとても重要で研究する価値があると考えられる。

意味論的分析の方法を選んだ理由は、外国語の作品などにおける滑稽が通じにくい場合が多いし、同じ国の人の間でも滑稽が通じにくい場合もある。また、滑稽の表現が通じないと、色々な問題がおこる。であるから、意味論アプローチから滑稽を研究すると、言葉の上で滑稽がどこから生まれたかということがあきらかになってくると考えられる。つまり、滑稽の研究に意味論アプローチが重要だと思われる。そして、本研究では、言語で意味が変化する一つの原因としてのレトリック技法の使用に注目する。その技法を用いた滑稽を研究することにする。

川柳を選んだ理由は、川柳がきわめて日本的な文学種類であり、17文字からなる世界で唯一の滑稽を表す作品であるから、川柳を対象にした。いいかえれば、この17文字という短い構成の詩に言葉の上で滑稽がどこから生まれたか研究するのは言うまでもなくおもしろいのである。

ベーラムの詩を選んだ理由はアラブ世界の文学で川柳と全く同様な種類がないが、川柳と一番似ているものがベーラムの詩だからである。詳しく言うと、ベーラムの詩は川柳の短い構成ではないが、その類似点として口語¹を用い、人情、風俗、人生の弱点、世態の欠陥などを取り上げており、滑稽文学に属している詩である。また、ベーラムはアラブ世界で最も優れた詩人の一人だと思われる。要するに彼の作品は川柳と同様に社会での文化と言語を反映する価値がある。

川柳は多種多様である。そのため、本論では、サラリーマンの川柳を分析対象とする。本論での川柳の例は主に『平成サラリーマン川柳傑作選』の①～⑤（2004）から収集した。そして、ベーラムの詩の例は主にエスマイル・エル・アクバウィの『ベーラム詩全集』から収集した。

本論は全三章から成り立つ。第一章では、川柳における滑稽を考察することを目的としている。本章を大きく二つに分ける。まず、1.1 では、川柳における滑稽の技法とされる色々なレトリック技法を整理する。それは、川柳でよく用いられる「反語法 (al-mufāraqah)、言葉遊び (al-tlāʿb bʿāl alfāz)、修辭疑問、設問法 (al-swʿāl albalāyy)、転喩 (al-kināyah)、換喩 (al-magāz almursāl)、直喩 (al-taʿbyh)」というレトリック技法である。それぞれの定義などを述べる。そしてそのレトリック技法を使って川柳の滑稽を考察する。最後に、川柳におけるそのレトリック技法の特徴を考えてみる。

次の1.2 では、川柳において隠喩 (al-ʾistiṣārah) を用いた滑稽を考察することを目的とする。1.2 では、まず、隠喩の選択理由を述べる。それから、隠喩を詳しく紹介する。最後に、川柳におけるその例を分析して、川柳における滑稽の技法とされる隠喩の特徴を提示する。第一章のまとめとして、1.3 では、川柳における滑稽を簡単にまとめる。

本論の第二章では、ベーラムの詩における滑稽を考察することを目的としている。本章は大きく二つに分ける。はじめ

¹ ここでは、口語を話言葉という意味であり、特定の方言ではない。ベーラムの詩には方言が出てくる場合もある。

に、2.1 では色々なレトリック技法を使ってベーラムの詩における滑稽を考察する。そのアラビア語のレトリック技法はal-mufāraqah (反語法)、al-taṣbyh (直喩)、al-kināyah (転喩)、al-tawriyah (言葉遊び)、そしてal-ʔitnāb (冗長)である。それぞれの技法を簡単に説明して、それからベーラムの詩におけるその例を分析し、それぞれの技法はベーラムの詩における滑稽の技法としてどんな特徴があるかのを考える。

次は、2.2 では、al-ʔistiṣārah (隠喩)を中心にしてベーラムの詩における滑稽を考察する。まず、al-ʔistiṣārahを紹介し、その例を分析し、最後にベーラムの詩における滑稽の技法とされるal-ʔistiṣārahの特徴を考えてみる。第二章のまとめとして、2.3 では、ベーラムの詩における滑稽を簡単にまとめる。

第三章では、川柳とベーラムの詩における滑稽との対照を目的とする。本章では川柳とベーラムの詩における滑稽に影響する要素を明らかにする。それから、川柳とベーラムの詩における滑稽の表現の技法を対照して、滑稽の考察を巡ってそれぞれのレトリック技法とその相当する技法の性質と特徴との類似点と相違点を明らかにする。最後に川柳とベーラムの詩における滑稽の話題にされるものの無限性とその類似点と相違点を述べる。

これから、前述の本論における四つの要素についてそれぞれ簡単に説明する。

0.1. 意味論

広辞苑によると、意味論は語や句、文などの表す意味、その構造や体系性を研究する言語学の一分野であると言う。本論では、言葉上で滑稽がどこから生まれたかという質問に答えるために、聞き手はレトリック技法を通して、言葉の表面的な意味からその裏の意味をさがす。つまり、意味の変化を引き起こすレトリック技法を中心にして滑稽を考察するのである。

アヤ (2014: p. 18) は意味の変化と比喩について以下のよう述べた。

意味の研究は 19 世紀から盛んになり、特に Bloomfield と Ullman の理論が代表的である。Bloomfield (1962) は意味の変化の種類を、短縮、拡大、メタファー（隠喩）、ミトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩）、誇張法、抑言法に分けて提唱した。

Ullman (1962: p 241) は意味の変化の本質について「変化がどのような原因によって引き起こされようとも、古い意味と新しい意味の間に何らかの関係、何らかの「連想」が必ずあるものである」と述べ、その「連想」を類似による連想と近接による連想とに分けた。さらに類似による連想を意味の類似（隠喩）と名称の隠喩（民間語源）、近接による連想を内容の近接（換喩）と名称の近接（省略）に分類した。

このうち、Ullman (1962: p255-256) は特に隠喩について以下のように説明している。

この四つの基本的な形はそれぞれの現れる範囲が大変異なる。隠喩は四つの中で絶対に最も重要なものであるが、換喩も極めてよくある現象である。省略は決してまれであるというわけではないが、一般的に言って重要性は限られている。一方、民間語源はそれに対する興味の大きさとは逆に主要な現象とは言えない。

Ullman (1962: p 246) は、意味の類似性（隠喩）は「趣意」と「媒介」という 2 項の存在が必要であり、両者が共通にもつ特徴が隠喩の「根底」となることを明らかにした。そして、人間のイメージに関する隠喩は非常に多いとし、その隠喩の中で主な四つのタイプを提唱した。それは擬人法的隠喩、動物の隠喩、具体から抽象への隠喩、共感覚的な隠喩である。

動物の隠喩については、「動物のイメージの多くは人間界に移ってきて、そこでしばしばユーモラス、皮肉、またグロテスクなニュアンスすらもつことがある。人間は数え切れないほど多くの動物にたとえられる」と述べた。また、萩山 (2010: p36) は隠喩の類似性について以下のように分析している。

まず形などの外見の類似性に基づくものがあります。コンピュータに手で操作する部分を「マウス」と言いますが、これは鼠の形（場合によって色も）との類似性に基づくものです。

次により抽象的な類似性に基づくメタファーを取り上げます。まず「故障」とは本来〈機械などが正常に機能しなくなること〉ですが、「肩の故障で、今シーズンを棒に振ってしまった」というように、「人間」に関して使われる場合もあります。この場合の「故障」は〈スポーツ選手などの体の一部が正常に機能しなくなること〉です。この新しい意味は〈正常な機能が果たせなくなること〉という本来の意味との共通点に基づくメタファーです。

以上から分かるように意味の変化は隠喩・換喩などのレトリック技法によって発生する。

瀬戸(2004) はレトリックを 3 種類に分ける。それは意味のレトリック・形のレトリック・構成のレトリックである。意味と形がおもに文を対象とするのに対して、構成は文を超える単位、つまり文章（テキスト）を対象とする。そして、瀬戸（2004： p 16）は『日本語のレトリック』において、意味のレトリックについて以下のように説明した。

（一）の意味のレトリックは、意味の変化に関係します。文字通りではない意味が活躍し、代表は隠喩や直喩です。これら以外にも、たとえば、「鍋が煮える」という表現も、個々に入ります。鍋は文字どおりではないでしょう。実際に煮えるのは中身の具のはずです。これは、入れ物で中身を表す換喩（メトニミー）という名の意味のアヤです。「電話を取る」も換喩です。これは全体（電話）で部分（受話器）を示すパターンです。

瀬戸は、意味のレトリックをさらに 1-意味を転換する、2-意味を調節する、3-意味を迂回するという三つの下位カテゴリーに分ける。ここで問題にするのは 1-の意味を転換するものである。瀬戸はこれを隠喩・直喩・擬人法・教感覚法・くびき法・換喩・提喩に分けている。

直喩・隠喩・換喩・提喩はレトリックの立場から見れば、「比喩」の下位カテゴリーである。従って、まず比喩に焦点を当てる。

「比喩」の定義は修辞学者によって多少異なる。大辞林では、比喩が「物事を説明するとき、相手のよく知っている物事を借りてきて、それになぞらえて表現すること」とされている。

広辞苑では「物事の説明に、これと類似したものを借りて表現すること。たとえ」とする。

森川（1986）は、比喩は修辞学上、直喩、隠喩、諷喩、提喩、換喩、引喩、張喩、などに分かれることを明らかにした。

同様に靱山（1997）も隠喩、換喩、提喩を比喩の下位区分としている。ただし、野内（2005：p327）は比喩について以下のように説明している。

西洋レトリックの trope（転義法）に「比喩」の訳語を当てることがあるが、転義法は「比喩」よりはるかに広い概念である。わが国では伝統的に「比喩」に西洋レトリックの直喩、隠喩、換喩、提喩、諷喩などを含めているが、本書では比喩は「類似性」を原理とするという厳密な立場をとっているので、「換喩」と「提喩」を除外する。

ここで問題になるのは「比喩」と「転義」の相違である。「比喩」を広義に解釈し、直喩、隠喩のほかに、換喩、提喩、

諷諭も含むとする意見もある。それに対して「比喩」の原則的な要素としての「類似性」を問題にし、直喩と隠喩のみを比喩とすべきだという主張もある。しかし、換喩、提喩と諷諭は意味の変化を起こすことも明らかである。その技法は「転義」に属するものであるからである。野内（2005：p338-339）は転義について以下のように述べた。

Figure(文彩)はギリシャ語の skhema(形)から由来していて、古典的な定義によれば通常の標準的な表現(形式)からの逸脱(偏差)とみなされる。---(中略)---これに対してトロープ(転義法) trope は「自然で基本的な意味作用の表現を別な表現に移動すること」である。ちなみにトロープの語源は「移す」である。---(中略)--- 転義法は意味作用の変換(意味を転ずること)であり、ある語を別のある語に置き換えることにかかわる。

野内は転義法に属するレトリック技法の例として、隠喩、換喩、転喩、提喩、誇張法、皮肉法、諷諭、擬人法などを挙げた。また、佐藤（2006：p190）は意味にかかわるレトリック技法のことを「意味作用のあや」あるいは「転義的比喩」と呼び、直喩・隠喩・換喩・提喩に分類している。そして、Tropes とは、単語を別の意味に読み替える技法で、転義的比喩を指す。

0.2. 滑稽

滑稽とは、広辞苑により、面白おかしく、巧みに言いなすこと。転じて、おどけ。道化。諧謔という意味であり、また、いかにもばかばかしく、おかしいことという意味である。ということは、滑稽は笑いを呼ぶ現象だと言える。滑稽はアラビア語での fukahah ということばと英語でのユーモアという言葉に相当する。しかしそれらの用語は全く同じだと言えないのである。それぞれは意味の上で特殊な範囲がある。つまり、その三つの用語は同じ意味に見えるが、実際はそれらの間に意味の微妙な境界がある。その境界の研究は本論の目的ではなく、本論では、それらの意味における共通の要素が本

論の対象である。その共通の要素は面白く笑いを呼ぶ表現のことである。言い換えれば、本論での滑稽の下位クラスとして、揶揄、冗談、機知、皮肉、風刺、面白い逸話、愚行、風刺画法、嘲り、パロディがあげられる。不思議なことに、アラビア語で悪口も滑稽の表現としてあげられる場合もある。たとえば、岡本（2007：p.117）はユーモアの定義について以下のように述べた。

ユーモアとはいったい何であろうか？ユーモアの定義についてはこれまで哲学、文化人類学、社会学、心理学などの分野でさまざまな議論が行われてきた。しかしながら、結論には至っていない。（省略）以上のよう、ユーモアの定義は必ずしも一致しているわけではないが、送り手からの刺激を受け手が「おもしろい、おかしいと知覚する」ことは共通している。そこで本節では、ユーモアを「送り手からの刺激に対して、受け手がおもしろい、おかしいという知覚反応を示す現象」と定義する。

要するに、本論では滑稽の表現は面白く笑いを呼ぶ表現のことであることを主張する。滑稽の研究には注意すべきものがある。それは滑稽の相対性である。つまり、ある表現について人によって滑稽の表現だと判断されるのである。ということは本論に収集した例は本論の研究者にとって滑稽の含む例であるが、滑稽ではないと判断される可能性もある。

0.3. 川柳

川柳は、広辞苑により、（川柳点の略から）前句付から独立した17字の短詩。江戸中期、明和ごろから隆盛。発句とは違って、切れ字・季節などの制約がない。多く口語を用い、人情・風俗、人生の弱点、世態の欠陥等をうがち、簡潔・滑稽・機知・風刺・奇警が特色。

復本（2005：p.14、p.19）により、川柳は五・七・五の十七音の文芸であり、世界で一番短い詩型である。また、「川柳が俳句とは別種の特徴、別種の面白さを明確に持っている文芸であるからこそ、人々はこよなく川柳を愛好するのである。」

川柳は口語を用いてつくられる国民文学作品の一種である。作者は数多くいる。川柳は日本語と日本の文化などの日本を反映する文芸である。

0.4. ベーラムの詩

ベーラムの詩はアラブ、特にエジプトの社会や言語²などを反映する大衆文学の作品の一つである。川柳と違って、決まっている構成がないのである。ベーラムは社会の欠陥などをなくす目的として、ベーラムは詩で人情、風俗、人生の弱点、世態の欠陥をからかい、皮肉り、詩の対象を笑い者にするのである。

作者はベーラム、エル・トニセイと言うアラブ世界での口語の最高の作者のひとりである。ベーラムはチュニア系エジプト人である。彼はアレクサンドリアで1893年3月3日に生まれた。文学者として有名になったのは『大根屋さん』を題とした詩を詠んだ後からである。その詩では町の市役所をからかっているのである。その詩の場面は町の市役所が国民からたくさんの税金を集めることである。ベーラムは町の市役所を対象にし人を笑わせたのである。その時は、その詩が学問を受けていない人の間でさえも普及した。

彼の作品は多く、文学上で価値がある。彼は社会での身分の高い人に対しても、直接的にからかいや皮肉を詠んだ。目的はよりよい社会にすることである。彼は68歳で、1961年1月に亡くなった。

以上で本論の目的と方法と構成を整理した。また、本論の四つの要素のそれぞれを簡単に紹介した。

² ベーラムの詩には、主にカイロ方言がでてきたが、エジプトの別の方言が用いられることも、フスハー（正則語）が用いられることもある。